

医療タイムス

週刊医療界レポート

2012.5/21 No.2060

クリニック掲載誌



特集

在宅医療のトツプラシナー
成長戦略の鍵を探る

タイムスインタビュー

「決してあなたのせいではない」
遺族に寄り添い再出発を優しくサポート

埼玉医科大学国際医療センター
精神腫瘍科教授

大西秀樹氏

タイムスレポート

介護職員によるたん吸引などの研修を実施
患者観察力は看護師と同等で今後に期待

Top News

がん登録法制化 議員立法を目指す 国会ががん患者の会
医学部新設に断固反対を表明 宮城県医師会・嘉数会長

診療所
探訪医師は医療の水先案内人
「心身ともに癒される場所に」

くどうちあき脳神経外科クリニック

院長：工藤千秋
 住所：東京都大田区大森北1-23-10
 TEL：03-5767-0226 FAX：03-5767-0327
 診療時間：9:30～12:00 16:00～18:00
 第2・4土曜日 9:30～12:00 15:00～17:00
 休診日：火・日・祝日
 URL：<http://www.kudohchiaki.com/>



待合室壁面に描かれた大野彩画伯によるフレスコ画(写真は工藤千秋院長)

「頭痛と脳の相談室」と看板に掲げるくどうちあきクリニック。院長の工藤千秋氏は、英国パーミンガム大学で世界最先端の脳神経外科を学び、帰国後東京労災病院脳神経外科に勤務。同副部長を経て、2001年東京都大田区大森にクリニックを開業した。

工藤氏は勤務医時代、担当した患者の退院後に関われないことにジレンマを感じていた。「診察、手術と関わってきた患者の、その後を見届けることなく転院させることに、いつも歯がゆい思いを抱えていた」と話す。退院後の患者が、どんな症状で、どんな治療を受け、どう過ごしているのか。自分が見届けたい、関わりたいという気持ちが膨らんでいた。「そうした矛盾点を解消し、理想の医療を実現すべく開業した」（工藤氏）

クリニックは、脳神経外科、心療内科、神経内科、整形外科を標榜している。その中でも、認知症を正確に診断し、西洋医学、漢方薬、栄養療法を組み合わせ進行を遅らせることに重点を置いた「もの忘れ外来」、工藤氏が英国でパーキンソン病外科治療チームの一員として治療していた経験を生かし多角的な治療にあたる「パーキンソン病外来」、頭痛、頸部痛、腰痛、節々の痛みをペイン・クリニックの技術を用いて治療にあたる「痛み外来」など、特色のある外来を設けている。

クリニックを開業するにあたって、工藤氏がまず心がけたことは、クリニックを治療の場だけではなく、「心身ともに癒される場所」にすることだった。

クリニックに入ると待合室にはアロマの香りが漂い、壁面には森をイメージした大野彩画伯によるフレスコ画、窓辺にはガラスを伝って清流が流れている。診察室も応接室のような空間になっており、布張りの高級ソファに季節の花が美しく飾られている。天井には天使が描かれたドームがあり光が降り注ぐ。「病気が治らなくても、当クリニックに来て良かったと思ってもらえる場所にしたかった」と工藤氏は語る。

工藤氏は医師の存在を、理念として「医療の水先案内人でありたい」と掲げ、毎日の診察にあたっている。「医療、特に脳や神経に関する病気について、患者が詳しいわけがない。医師が先頭に立って患者、そして家族の相談にのり、説明し、不安を取り除く案内を心がけている」

専門の脳外科だけでなく、あらゆる症状の相談にのり、必要に応じて適切な専門医を紹介する。「的確に振り分けてあげることも、医師の大事な仕事」と考えている。よってクリニックでは「患者の症状が改善する、緩和されるのであればどんなことでも導入する」というスタンスだ。西洋医学だけではなく、アロマセラピー、ヨガ、リフレクソロジー、カラーセラピー、漢方薬など、代替医療も積極的に取り入れている。

患者目線に立って、居心地の良さ、医師の役割を追究する工藤院長の姿勢は、穏やかな口調と温かい笑顔と相まって、訪れる患者を癒し続けている。